

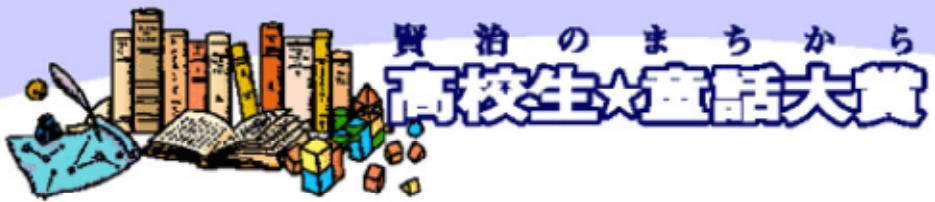
第15回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「冬馬とカンタ」

兵庫県立洲本高校三年 田中 春日



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞



優秀賞 〈銀の星賞〉

『冬馬とカンタ』

兵庫県立洲本高等学校三年

田中

春日はるひ

「冬馬！ そんなの一瞬だよ！」

夏の暑い日に、カンタは言った。その日は終業式で、冬馬は初めてカンタに、夏休みが終わったら東京に引っ越すことを話した。

「でも、東京だよ？ ここから、二日もかかるんだよ？」

冬馬は泣くのを止めて、カンタを見た。二人で長い坂道を登りながら話す。登校するときは下り坂になるので、二人で足がもつれそうになりながら駆け下りる。その坂も後少しで終わりという時にカンタはそう言って、一気に坂を登りきった。

「二人だけで、車でトウヒコウしよう！ ずーっと遠くまで逃げるんだ！」

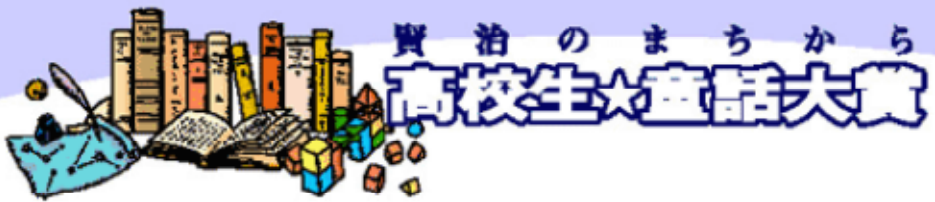
「トウヒコウってなに？」冬馬も追いついて、肩で息をしながらカンタに聞いた。

「悪い奴とか、追いかけてくる奴から、二人で逃げるんだよ。ほら、愛のトウヒコウって言うじゃん！」

「それって、恋人同士がやるんじゃないの？」

「もう！ 細かいことはいいから！」

学校の近くで拾った、長い木の棒を後ろに放り投げカンタは冬馬の手をつかんで、いきなり走り出した。引っ張られるまま走り続けて、キ代ばあちゃんの家に着いた。キ代ばあちゃんは、二人の団地の近くに一人で暮らしている。八十歳をとうにこえているというのに、とても元気で家の裏の畑や、トラクターの故障、屋根を直すのだって全部一人でやってのける。しわしわな顔が、笑うと余計しわしわになって、二人が「うめぼし！ すっぱーい！」というとき、もっと顔をしわくちやにして、頭をがしがしなでてる。冬馬のお父さんは家に帰ってくるのが遅いので、キ代ばあちゃん家によくお世話になっていた。



二人がついた時、キ代ばあちゃんは庭でシイタケを干していた。二人が来たのを見ると手をとめて、にっこり笑って、

「よく来たね。さあお昼にしようかい」

と言って、まだザルの上に残っていたシイタケをひよいひよいつと手際良く並べ終え、玄関に向かった。冬馬たちもついて行って中に入る。キ代ばあちゃん家はクーラーなんてないのに、いつもひんやりしている。縁側に座って、犬のリンをなでていると、キ代ばあちゃんが冷麦ひやむぎを三つ持ってきてくれた。冷麦はキ代ばあちゃん家でとれたキュウリやトマトの下に、ぷりぷりしためん麺がたっぷり隠れている。

三人で縁側に座って、冷麦をずると食べる。冷麦が終わると、キ代ばあちゃんは大きなスイカを三切れもってきて、また縁側に座った。

「じゃあ、何かい？ 冬馬は夏休みが終わったら、東京に戻るのかい？」

冬馬はスイカを受け取りながら、ぶすつとした顔でうなずいた。そうだったと、カンタはまた思いだした。夏休みが終わるのなんて、去年と一緒であつという間に違いない。冬馬はスイカを一口ぱくつと食べて、

「ぼく、嫌だ。東京に行くの。東京に行きたいなんて一言も言ってないもん」

と言った。キ代ばあちゃんはちよつとしてから、スイカをぱくつと食べて、

「冬馬がいなくなるのはさみしいねえ」

と言った。

「カンタとキ代ばあちゃんのいない所なんて嫌だ、遠いし。僕らこんな仲良いの」

冬馬はそう言うと、ぶすつとしたままスイカをぱくぱく食べた。キ代ばあちゃんは何か考えている風にしてから、

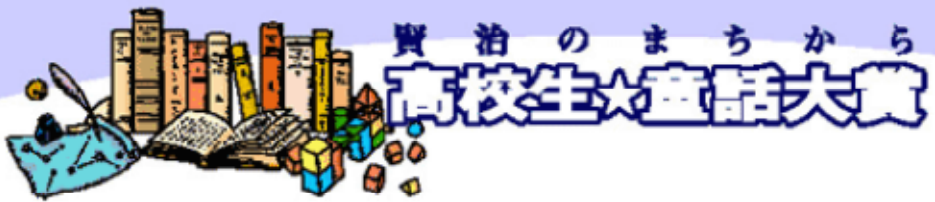
「距離なんて関係あるのかい？」

そう言って、ぷつと種を庭に飛ばした。

ご飯も食べ終わって、昼寝をして、三人でリンの散歩をしたところで、五時の鐘がなった。「からすのこ」を聞きながら、玄関に向かう。ランドセルを背負って、ばいばい、と二人で言うと、キ代ばあちゃんは頭をなでながら、

「冬馬、カンタ、またおいで」

と言った。心なしかいつもより、がしがしが優しい気がした。



二人の団地にだんだんと近づいてきた。カンタは立ち止まって、ポケットに入っていた、赤いミニカーを取り出した。そしてそれをカンタに突き出し、「やる」

と言った。冬馬は少しショックそうな顔をしてから、むっとしたように、「いらない！ 何なの、センベツってやつ？」

そう言っつて、カンタの手を勢いよく払った。冬馬の手はカンタの手より少し上、ミニカーに直撃して、ミニカーがふつとんだ。

「あっ！」

カンタの大きな声が響く。ミニカーは綺麗に真っ直ぐ飛んで、横にあった田んぼにぼちゃんと落ちた。

「おれの車！」

がぼつと田んぼを覗いたが、ぷくぷくと小さな泡を残して、ミニカーは沈んでいった。

「う、ごめん……。ごめん、カンター！」

と言っつて、エンエン泣き出した。辺りは夕暮れで、田んぼの水に光が反射して底がよく見えない。カンタは道路に座り込んだまま、冬馬の泣く声を聞いていた。こぼつと最後の泡が消えた。あーあ、ミニカー。俺の宝物だったのに。カンタはなんとも言えない気持ちになった。しかし、泡が消えた途端、今度はほこぼこ音がして、何かが田んぼから出て来た。次の瞬間、ぼんつという音がして、田んぼの中から、遊園地のゴーカートほどの大きさになったミニカーが現れた。ちょうど二人乗りで、こどもが乗れるくらいで、カンタと冬馬にぴったりだった。二人は突然のことではかんとなった。しかしこの瞬間、カンタに良い考えが浮かんだ。

「冬馬！ 車！ トウヒコウできるよ！ 東京も追いつかないよ！」

二人で顔を見合わせて、田んぼの中に降り、車のところまで走った。心なしか、田んぼの水が減ったような気がした。まるで車がスポンジになったみたいだった。カンタはあせるように、ドアをあけて刺さっている鍵を回すと、ぶーんと音がしてエンジンがかかった。二人で顔を見合わせると、うなずいて車に飛び乗った。

「トウヒコウ、しゅっぱー！」

カンタはそう言っつて思いっきり、アクセルを踏み込んだ。



いつも走っても走っても追いつかないとんぼにだって、追いついて追いついて追い越す。キ代ばあちゃん家の横を通るとリンが、ぼくも乗せてよ！っていうみたいに吠えている。窓から外を見ると、そのリンも凄^{すご}い速さで後ろに流れていく。道端の雑草や、木もびゅんびゅん追い抜いて、僕たち速すぎて、忍者にみえるんじゃないの、と、二人で少し笑った。そして二人でいつも通って帰った、長い長い坂道がやってきた。

走るのとは比べ物にならない速さで、坂を下りる。自分の足で走るよりはるかに早いはずなのに、でもとても長く感じる。あまりにも長くて、このままずっとシートベルトがちょっと食い込んで前のめりのままなのかな、とカントは少しどきどきした。冬馬もべたっとフロントガラスに張り付いて空を見上げている。速すぎて、今にも空へ飛んでいきそうだ。突然横に続いていた木がなくなり、視界が広がった。いつもの坂道を走っていたのに、いつものまにか道のはしっこはガードレールだけで、田んぼはなくなっていた。そして田んぼは、一面の海になっていた。坂道は海の上を走る一本の橋みたいになっていた。前のめりのままカントは空を見上げて言った。

「わあ……」

見たこともない光景が広がっていた。真っ暗な夜空の中に、キラキラと魔法の粉みたい、星がたくさん輝いている。星は海にも映っていて、海が波打つたびにふるふると震えていた。空も海も、星だらけでふわふわ飛んでるみたいだな、とカントは思った。

「ねえ、冬馬！ 星が凄くキレイ！ 魔法の粉みたいだよ！」

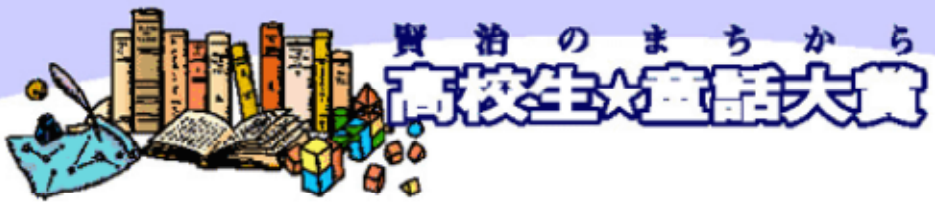
冬馬は首がとれそうなのはどうなずいて、

「多分、そのおかげで僕たち魔法にかかっているんだよ！」

そう言って、こっちを見てニシシと笑った。カントはこの笑顔が本当に大好きだ。その笑顔が一ヶ月後、どこかに行ってしまうなんて信じられなかった。

もう少し走っていると看板のようなものと、その先の道路が二つに分かれているのが見えた。一方は真っ直ぐで、もう一方は空に続いているように見えた。看板まで近づいてから、車をキキーッと止めると、看板には、

左↓プリン博物館…六十キ口



右↓空中図書館…十キロ

と書いてあった。カンタは空！と思った。ここではたと、思い出した。冬馬の大好物はプリンだった。恐る恐る冬馬の方を向くと、冬馬はこっちを見つめていた。そして上を指差し、

「空！」

と言っ、またニシシと笑った。

車のエンジンをかけ直して、右の長い坂道を上がる。海から離れて少し前から、小さな雲が車の周りをフワフワ漂うようになってきた。まだかなあと二人で話していたら、ひととき大きな雲が見えて来た。その手前に、駐車場と思われるスペースがあったのでそこに入り、車を止めた。カンタは運転席のドアを開けて、そーっと足を降ろす。なんていったって、雲の上だ。気を抜いたら、足が抜けて海にまっさかさまかかもしれない。しかし案外雲の上はしっかりしていて、土の上とそう変わらなかった。『空中図書館はこちらへ』という看板に従って、二人で雲の階段を登りはじめた。

階段を登り終わると、大きな建物が現れた。

「すげえ、建物……」

二人はほおっとなった。こんな建物、テレビで見たことあるなあ、なんとか神殿、なんだっけ、パピポポ？神殿だっけ。いや、違う。そんなんじゃない、パペポポとかそんなだった、と二人でワイワイやってると、その横を、二人組の女の人がクスクス笑いながら、建物に入って行った。二人で顔を見合わせて、

「行くぞー！」

と照れ隠しにカンタは言うど勢いよく冬馬を引っ張った。

大きい柱の間を通り抜けて、大きな扉を開けて建物に入ると二人は思わず、立ち止まった。真ん中には机と柔らかそうなソファが沢山あって吹き抜けになっている。全部で八階程だろうか。吹き抜けに面して、各階に廊下があってその奥に本棚が見える。石造の建物に、深い赤のカーペット。少しくすんだ金色の雲の装飾がいたるところにみえる。天井には大きな六角形の窓がついていて、星と月が見えた。きれいな楽器の音がBGMで流れている。本当に凄くきれいだ。そこにいる人たちのひそひそ話す声まで、なにかの楽器の音みたいだ。今まで来た図書館の中でナンバーワンなのは間違いない。



カントはふと、となりに冬馬がいないことに気づいた。うわ、と
思っていると、冬馬が走って来て、

「カント、これ見て！」

と小声で言うや否や、Tシャツのえりを掴んで、入口のすぐ横にある図書館
の案内みたいなどころにカントを連れて行った。

「ぐえ、首しまるだろー！」

カントが言うのと、冬馬が苦笑いしながら、

「ごめんごめん。でもさ、これみて、凄くない!? ほら、五階で『空のお菓
子展』やってるって書いてあるよ、行こうよ！」

と言った。なるほど、確かにそう書いてある。カウンターから、女の人が、

「何かお探ですか？」

と声をかけて来た。黒い目にうすく青がかっていて、さっきの海みたいだ
な、とカントは思った。しかし何かおかしい。図書館に来ている人は、よー
く見ると、みんな耳がピンとがっている。大人、子供、おじいちゃん、
おばあちゃんまで、みんななどがっていた。そしておかしいと思ったのは、も
ちろんこの女の人も耳がとがっていたからだ。カントと冬馬が何も言わ
ずにいると、女の方は怪訝けげんそうな顔をしてから、二人をじーっと見て、

「あれ、あなた達、耳が何か変ね……」

と言いながら、冬馬の耳に向かって手を伸ばしてきた。カントは直感でやば
い!と思った。

「お姉さん! これ、そこで誰か落としたみたいー！」

そう言っって、ポケットに手を伸ばして、虫のおもちゃを握って取り出した。

女の人は冬馬に伸ばしていた手をカントの方に向けて、

「何かしら? 私が預かっつくわ」

と言っって、手を差し出した。カントは女の人の手の平の上で、ぱっと手を開
いておもちゃを渡すと、冬馬の手を引っ張っって、すぐ横のエレベーターに飛
び乗った。ドアが閉まる時、女の人がひいっと言っって、投げた虫のおもちゃ
がカウンターのの中にいたすぐ横の男の人にヒットしたのが見えた。

これまた豪華な造りのエレベーターが五階で止まると、ゆっくりと開いた。

「うわあ……」



そこはアートバルーンみたいなので作られたアーチに『空のお菓子展』と書かれた幕が垂れ下がり、その向こう側に小ぶりのスペースをいっぱいぱいに使って、色んなお菓子が並んでいた。雲の形のキャンディやガム、星みたいなキラキラ光っているゼリーや、虹色のチョコレートフォンデュみたいなものもある。その中でもひとときわ淒いのが、ふわふわと宙に浮いている雲だった。いや、よくみると綿菓子みたいだ。いつもよく見るような、白い色の物もあれば、夜みたいに暗い色のものや、夕焼けのオレンジや、ピンクみたいなのもあった。その下で子供たちが割り箸みたいな棒を握って、綿菓子をぶすっと刺して、くるくるっと巻き取ると、美味しそうにむしゃむしゃ食べだした。冬馬と顔を見合わせて、ニシシと笑うと二人で綿菓子の所へ走り出した。近くにいた大人の人から棒を貰うと、カントは白い綿菓子をぶすっと刺そうとしたが、雲がひょいっと逃げた。うん？と思ってもう一回刺そうとすると、またひょいっと逃げる。カニ歩きで雲と格闘していると、とんつと誰かに当たった。冬馬だった。

「カント！ 雲つかまらないんだけど！」

とちよっとぷりぷり怒って、大きな声で言った。すると、周りにいた大人、子供が一斉にぱっとこっちを振り返った。すると一番近くにいた男の子がカントの耳を指差して、

「耳が丸い！ 地球人だ！」

と叫んだ。なんだそれ、と思い終わるか終わらないかのうちに、周りの人達が騒ぎ始めた。口ぐちに警察だ、誰か、と叫んでいる。

「あれ？ なんか、やばい？」

二人は手を繋いで、人ごみの中を走りだした。一目散にエレベーターに飛び乗ると、一階のボタンを何回も押す。チーンという音がして扉が開くと、白い警察官の制服を着た男の人が三人立っていた。もちろん耳はとがっている。真ん中の警察官が、手帳みたいなのを取り出して、二人に突き付けた。

「空中警察だ。地球人が現れたと通報を受けたので駆けつけた。地球人はお前たちだな？」

どくん、どくんと心臓の音がやけに大きく聞こえる。足がすくんで動かない。そんなカントの目の前で、冬馬がいきなり警察手帳をぱっと奪って、思



いっつきり遠くに投げた。やっぱり冬馬はニシシと笑っている。手帳はきれいに、真ん中の吹き抜けに吸い込まれていった。ぽかんとしていた警察官が、「……な、なにをする！」

と慌てて手帳を取りに走った。しめたとばかりに、二人で走り出した。

階段を急いで駆け下りて、車に飛び乗った。エンジンをかけて、とりあえずここから離れるために走り出した。後ろからパトカーの音が聞こえてくる。カントはハンドルをぎゅっと握った。

無我夢中で走り続けたので、カントは今どこを走っているのか分からなくなった。時計もないし、お腹が減って来た。今何時なんだろう？ パトカーとの、でたらめなカーチェイスのせいで、二人は帰り道を見失い、どんどん空に向かって走っていた。来た時は夕暮れくらいだったのに、外はもう真っ暗だ。途方に暮れるカントの横で、

「もう帰りたい……」

と冬馬が泣きだした。

「冬馬……。おれも……」

ガコンツとカントの言葉が遮られた。何が起こったのか慌てて外を見たが、真っ暗で何も見えない。後ろを振り返った冬馬が叫んだ。

「カント、後ろ！」

後ろを振り向くと、そこは暗い空に浮かんだ地球が見えた。地球は青かった、と誰か昔の人が言ったらしいけど、本当に青かった。夏の空みただった。

「ここ、宇宙!？」

「カント、前見て！ 危ない！」

目の前にあった、大きな惑星のようなものに、思いっきりぶつかった。衝撃で二人は車から放り出された。

「いてて……。冬馬、だいじょうぶ？」

「うん、だいじょうぶ。それより、みてこれ。車が」

そう言う冬馬の手をのぞきこむと、ミニカーは元通りの大きさに戻っていた。冬馬がカントの方にミニカーを手渡してきた。

「これは冬馬が持ってて」



カンタがそう言うと、冬馬はミニカーをぎゅっと握りしめ、大事そうにポケットにしまった。

「どこどこだろう？ 宇宙なのに、全然苦しくない」

真っ暗で、何の音もしない。音が何もし無さ過ぎて、耳が痛くなりそうだった。いつも見る、何倍もの数の星が点々と輝いている。カンタは、ここまで来た長い道のりを思い出した。キ代ばあちゃん家を出て、ミニカーがおつきくなって、海の上を走って、空から逃げて、宇宙まで来てしまった。でも、カンタは途中で気付いていた。そして冬馬に言うなら今しかないと思った。横にいる冬馬を見ると、うわ、すごい！と何回も言いながら、忙しく星を見ている。カンタは突然恥ずかしくなったので、ぼそっと、

「距離なんて関係ないよ」

と言った。こんな宇宙まで来たんだ。東京なんてあつという間に決まってる。

冬馬はピタッと止まって、

「ぼくも言おうと思ってた」

と言って、ニシシと笑った。

「ワン、ワン、ワン！」

二人がはっと目を覚ますと、リングが凄く近くで吠えていた。そこは宇宙じゃなくて、キ代ばあちゃんの家だった。

「起きたのかい？」

キ代ばあちゃんが顔を覗きこんできた。そうだ、ご飯を食べて、昼寝の最中だったんだ。でも、二人は宇宙まで行った。それは確かだった。

「キ代ばあちゃん、あのね、距離なんて関係ないよね」

二人が同時にそう言うと、キ代ばあちゃんは少し驚いた顔をして、

「当たり前だよ」

と言うと、いつもみたいに顔をしわくちやにして、二人の頭をガシガシなでた。